

GO！プリンセスプリキュア短編集

仮名はるかな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

GO!プリンセスプリキュアのアニメ本編準拠の短編集となります。

本編で描かれていない間に、ひよつとしたらこんな話があったかも？ という妄想を書き連ねていくつもりです。

ストーリーは、各短編で独立したものとなる予定です。

目次

もどかしい距離	
もどかしい距離（前編）	1
もどかしい距離（後編）	9
トワっち誕生日記念SS	
赤のコンチエルト	17
3・5話 みなみの悩み!? 花が教えてくれたこと!	
1 / 4	24
2 / 4	30

もどかしい距離 もどかしい距離（前編）

「――帰りのHRを始めます」

担任の先生が、教卓からクラスを見回した。

多くの生徒が叶えたい夢を抱いて入学してくる名門校、ノーブル学園。必然、夢に近づく為に部活動に励んでいる生徒も多く、放課後への期待感も、普通の学校とは熱の種類が違ってくる。なので、帰りのホームルームとなれば、その熱を解放する瞬間を一分一秒、焦れるような思いで担任の声に耳を傾ける生徒がほとんどだ。夏休みの迫った最近では、尚更だった。

が、きょうは少し雰囲気異なる。

生徒同様、期待感はある。焦れる思いもある。

しかし、それが担任の言葉へこそ向けられていた。

――みんな、わっかかりやすいなあ、もう。

担任の話をもっとも増して真剣に、けれどどこか落ち着きなく聞いているクラスメイトの様子を見て、きららは苦笑した。一番後ろの席からだど、みんなが“おあずけ”をくらっている様子が手にとるようにわかる。とはいえ、その気持ちはきららも同じだった。

というのも、きょう、今年から始まるある学校行事の正式発表がされるだろう、ともっぱらのウワサになっているのだ。

しかし、クラス中の期待を一身に集めている担任はなかなか本題を切り出さない。いつも通りにホームルームを進めていく。話が進むにつれ、いまかいまかと期待が高まっていく生徒たち。

「もう、先生も焦らすよねえ」

コソ、と隣の席に座る友だちに耳打ちする。

「……焦らす？　なんの事ですか？」

が、返って来たのは訝しげな声だった。思わず見れば、小首を傾げる赤毛の少女と目が合った。

「……あれ？　ひよつとして気付いてない？」

「何のことですか？ それよりも、ダメですわよきらら。きちんと先生のお話を聞かないと」

こそ、と小声でささやくと、生真面目な友達は前に向き直ってしま

う。

どうも、クラスの常ならぬ雰囲気にも気付いていないらしい。

そんな友だちの様子に、きららはふと思いついた事があった。

——ていうか、そもそもトワっちとあの話自体、したことあったっけ……？

まさか、とは思う。

学園中で話題になっているウワサを知らないなんて事、あるはずない。

——でも、トワっちならひよつとすると。

マイペース過ぎるこの友だちなら、あり得る。あり得てしまう。

そもそも、ホープキングダム出身の彼女なら、”あの行事”そのものを知らないなんて可能性もある。

「ね、トワっち。ひよつとしてさ——」

「さて、次が最後のお知らせね。と言っても、みんなもう、知ってるみたいだけど」

きららの声は、担任の言葉と小さくどよめくクラスメイトらにかき消された。

果たして、担任が告げる。

「今年から、ノーブル学園の夏祭りへの屋台参加が決まりました」

瞬間、クラスメイトから弾けんばかりの喝采が上がった。

「いよっ、待ってました！」「オレら、今年からノーブル学園入学で良かったー！」「やっぱ昼間だけじゃ寂しいもんなー！」「これで祭り全力で楽しめるぜっ！」「あたし、綿あめやりたい！ こう、グルグルーっ

て！」「あたしもあたしも！」「花火の場所取りって出来んのかな！」

焦らされていた分、喝采を上げるクラスメイト達。

彼らがここまで沸き立つわけは、この学園独特の夏祭り事情にあった。

8月の頭に開かれる夢ヶ浜の夏祭りは、時期的に実家に帰っていつ

たクラスメイトと示し会わせて集まるのにはちょうどいいイベントだった。お祭りの時期に合わせて寮に戻って来るのは、もはやノーブル学園の恒例行事だ。

しかし、ここで校則がネックになる。

寮では原則、夜間の出歩きは禁止。理由が認められれば許可されるものの、学園側にも体面がある。夏祭りという遊びの為に許可は下しにくい。

そんなわけで、寮の狭い窓から花火を見上げるのもまた、ノーブル学園の恒例行事となっていた。

そんな生徒たちの為に考えられたのが、生徒の屋台参加だ。

その企図は、生徒たちへ屋台への参加を通して社会経験を積んでもらう事。同時に、生徒たちに夜間外出の許可を与える口実にもなる。

こうして、学園の校則と生徒の望みの折り合いがついて、いよいよ今年から夏祭りを遊び倒せるという訳だ。加えて、屋台の体験まで出ると来れば、生徒たちが盛り上がりがないわけがなかった。

が、ただひとり、そんなクラスメイトについていけない生徒が居た。

「……ナツマツリ？ 祭り……何かの祭事でしょうか？」

トワである。

ひとりだけタレ目をパチパチと瞬かせて大はしやぎするクラスメイトを不思議そうに見ている。案の定な反応に、きからは苦笑しつつ口を開く。

「あー……トワっち？ 夏祭りって言うのはね——」

「え？ トワ様夏祭り行った事ないんですか!？」「楽しいよー」「あ、ひよっとして綿あめ食べた事無い?」「かき氷は?」「浴衣着てさ——」

「今年は夜まで遊べるし——」「ね、トワちゃんはどうな屋台が——」

「——で、花火がこうドカーンて上がって——」

しかし、トワの呟きを聞きつけた近くの席のクラスメイトがどつと押し寄せてきて、きからは弾き飛ばされてしまった。四方をクラスメイトに囲まれたトワは目をまん丸くしてきよときよとと首を巡らせる。

「すごいトワ様っぷり……」

その様子を、きららはちよつと唾然としながら見た。

トワが転校してきてから二週間ばかり、彼女はすっかりクラスの人気者となっていた。

普段の気品溢れる立ち居振る舞いと、ふと見せる世間知らずな天然ぷりというギャップが、クラスメイトの心を掴んだのだ。

お蔭でトワは、『憧れのお姫様にしてみんなの妹』という独特の地位を早くも築きつつある。何はともあれ、トワがクラスに馴染めてきからは内心ホツとしていた。

していた、のだが。

「あー……みんな。そろそろ席に戻らないと——」

「静かにつ！ まだホームルームは終わってないですよ！」

いまは、そんなトワ様人気は間が悪い。

きららの忠告は間に合わず、先生から一喝が飛んだ。はしやいでいた生徒らは我に返り、慌てて自分の席に戻っていく。

「ナツ、マツリ……？」

後には、きよとん、と小首を傾げるトワが残された。



「はい、コレ。頼まれてたヤツ」

いつもの顔ぶれ——はるかにみなみ、きらら、トワ、ゆい。それにアロマとパフもいっしょに夕食を食べ終えると、きららはトワに一冊の雑誌を差し出した。

「まあ、コレが……！」

トワがしげしげと見る雑誌は、きららが毎月、ファッションの研究で買っているものだ。そして、最新の八月号の特集は『今年の浴衣はコレで決まり！』。表紙を飾るモデルも浴衣姿だ。

「なにになにー？ あ、カワイイ浴衣がいっぱいっ！」

「トワがちが浴衣見た事無いつていうからさ」

トワの手元を覗き込んできたはるかに説明する。

「そっかー、トワちゃん夏祭り初めてだもんね」

「実は私も……」

「え、みなみさんも!？」

「夏はお父様もお母様も忙しくて。連れて行ってもらう機会が無かったのよ。去年の夏も、海藤グループのイベントに参加していたから、こちらに帰って来る間が無かったし」

「確かに、海藤グループって海沿いのリゾート地とかいっぱい経営してますもんね。夏って言えば、一番忙しくなるのかも」

「なら、みなみさんもトワちゃんも夏祭りデビューですねっ!」

「ええ、貴重な夏休みの体験ね」

「トワちゃんも楽しみだねっ! ……って、アレ?」

「これが浴衣……綺麗……」

はるかがトワを見ると、会話などそっちのけ、食い入るように雑誌を見ていた。

「あはは……トワっち、すっかり夢中になってる」

「え? なんですの?」

ようやくみんなの目線が自分に集まっている事に気付いて、トワが顔を上げた。そんな彼女に、きらは少し口を尖らせて言う。

「夢中になるのは良いけどさ、さっきみたいのは勘弁してよー」

「あ、あれは……つい」

「さっきって?」

はるかが尋ねると、きらは苦笑交じりに肩をすくめた。

「ホームルームの後で、クラスみんながトワっちに夏祭りについて教えたんだけどね。トワっちったら、ポロツとわたくしの世界ではー、とか言い出しちゃうんだもん。もう冷や冷やしちゃったよ」

「あ、あれは浴衣というものが珍しかったもので、つい……」

「それと、盆踊りを教えてもらったときも、でしょ?」

「それも、ホープキングダムには無い文化だったんですもの」

「リング餡は?」

「だって、リングを丸ごと餡に漬けているんですよ?」

「綿あめ」

「雲みたいな飴なんて、想像出来て？」

「宇治金時かき氷」

「だ、だってなんだかあんみつに似ている気がして……もうっ、きょうのきららは意地悪ですわ」

終いには、トワはプイツと顔を背けてしまった。

普段は正にプリンセス然とした佇まいなのだが、最近は時おり、こうして子供じみた仕草を見せるようになった。トワが段々と自分たちを打ち解けてくれているのだと思うと嬉しくて、机を囲むはるかたちの顔も自然とほころぶ。

「なんなんですよ、みんなまで」

「そう拗ねないで、トワ」

むくれるトワに、すかさずみなみがフォローを入れる。ナイスみなみん。きららが内心思ったのもつかの間、

「きららは、本当はトワに自分で夏祭りの事を教えたかったのよ。それをクラスのみんなに取られたから、ちよっと拗ねているのよ」

思わぬ反撃が来た。

「まあ、そうなんですよ？」

「ちよ、みなみん何言ってるの!? 意味わかんないし」

「きららちゃん、トワちゃんの事大好きだもんねっ!」

「はるはるまでー!」

「まあまあ、きららちゃん、落ち着いて。ね?」

「そう言いながらゆいゆいはスケッチブック開かないのっ! 何描く気!?!」

きららがあたふたとみんなにあれやこれやと言ひ繕っている様をみてトワはコクン、と小さく頷くと、とりわけ澄ました風にして口を開いた。

「きららは素直じゃないのね。仕方ありません、みなみに免じて許して差し上げますわ」

「あー、もうっ! トワっちの意地悪っ!」

まるで立場が逆転してしまったふたりの様子に、みんなの笑い声が弾けた。

消灯時間が迫り、きららはトワといっしょに寮の部屋に戻った。後は寝るだけ、という段になって、ふと思いつ事があった。二段ベッドの上から、ひよい、と身を乗り出すと、トワはまだ机に向かって、きららの渡した雑誌のページをめくっていた。しかし何故か、その横顔は憂いを帯びている。どこか引掛かりを覚えつつ、声をかけた。

「ね、トワっち」

「なんですの？」

「夏休み入ったらさ、どつかで予定合わせて街に行かない？」

「街に？ どうしたんですの、急に」

「ほら、トワっち浴衣持っていないでしょ？ だからいっしょに買いに行こうかなあ、って。どう？」

きららが身を乗り出すと、トワは何故か顔を曇らせた。

「どしたの？」

「実は、わたくしも気になっていたのですが……やはり、浴衣というドレスコードを守らないと夏祭りには参加出来ませんの？」

「そんな事無いって。トワっち、夏祭りのイメージちよつとヘンだよ？」

神妙な口調で問われ、思わずきららは苦笑しながら言葉を続けた。

「でも、せつかくの夏祭りだし、楽しむなら全力で楽しまなきゃソーンじゃない？」

「そう、ですわね。ただ……浴衣でなくても参加出来るのなら、わたくしは普段着ている服で構いませんわ」

「えー、なんでー？」

トワの予想外な言葉に、きららは思わず眉をハの字にしてしまう。

「もちろん、きららが誘ってくれたのは嬉しいですわ。けれど……」

「けれど？」

「きららもモデルの仕事が忙しいのでしょうか？ わざわざわたくしの買い物に付き合わせてしまったては申し訳ないですわ」

「そんな事ないって。任せて、スーパースタイリストのきらら様が、トワっちが最高に可愛くなれる浴衣探しちゃうからっ」

「ありがとう。でもそれを言うなら、以前、きらららに選んでもらったあのワンピースで十分。あれ、すごく気に入っていますもの。夏祭りも、あの服で行くつもりですわ」

「そりゃあ、あの服もトワっちにめっちゃ似合ってるけどさ……」

「ほら、きらららのセンスに間違いはないでしょう？ さ、そろそろ寝ませんと。雑誌、ありがとうございました。机に置いときますわね」

トワは早口で言うや、下段のベッドに潜り込んでしまった。

「おやすみなさい、きららら」

「……うん。おやすみ」

なんだか釈然しないものを感じつつ、きららも横になった。目を閉じながら思う。

——いま、トワっちどんな顔してるんだろ？

二段ベッドの隔てる距離が、少しもどかしかった。

もどかしい距離（後編）

夏休みといっても、きららの場合、学校が無い分をモデルの仕事に割くため、休みという感覚は薄い。

それでも、はるかの実家へみんなまで泊まりに行ったり、逆にトワを自分の実家へ招いたり、母親と空いた時間を見つけてショッピングしたりと、きららなりに夏休みを満喫して、気付けば七月は終わっていた。

八月に入れば、すぐに夏祭りだ。

生徒たちが帰省先から戻ってくると、ガランとしていた寮はひとときの賑やかさを取り戻し、食堂では夏休み中の話題に花が咲く。並んで話題となるのは、もちろん夏祭りのことだ。

そんな中であって、いつも通り落ち着いて見えるのは、生徒会長のみなみくらのもの——に見えたが、

「これがお祭りのタイムスケジュール。こっちは去年人気だった屋台のランキング。で、こっちは花火見学のスポットよ。よければ参考にしてください」

実際はそうでもなさそうだった。

五人（と二匹）が揃ったテーブルの上に、テキパキと地図やらグラフやらを広げていく。その情報量たるや、そのまま『夢ヶ浜の夏祭りガイド』として旅行誌の特集を組めそうなほどであった。

「さすがみなみさんっ！」

「まあまあ」

「すごい、屋台の見取り図まである……！」

「みなみん、準備良すぎだっつて」

賞賛や感嘆、苦笑、各々に反応を見せると、みなみはわずかに顔を赤らめた。

「こういうお祭りって初めてだから、つい張り切っちゃって……」

「わたしも張り切ってますよー！ 自分たちで屋台が出来るなんて、ワクワクしちゃいますよねっ！ これでみんなでいっしょにお祭り回れたら、幸せ満開だったんですけど……」

はるかが目をキラキラ輝かせたかと思いきや、眉をハの字にして肩を落とす。

「こればかりは仕方がないわね。みんなそれぞれ、予定がバラバラなもの」

はるかを慰めるみなみの言う通り、夏祭り当日は、みんな屋台の当番を受け持っている上、きららは夕方までモデルの仕事が、みなみは生徒会で屋台の設営の手伝いがあった。

だから、はるかとうい、きららとトワ、みなみと生徒会メンバー、といった具合に集まりやすい仲間同士で集まって、お祭りを楽しもうと決めていたのだ。

「そーそー、それに、時間が合えばはるはるが当番やってるときに屋台に行くよー」

「え、ホントに!？」

きららの言葉に、はるかが身を乗り出した。

「もっちろん。あ、でもその代わり、少しだけまけてね?」

「任せてきららちゃんっ! 値下げ満開だよっ!」

「は、はるかちゃん、クラスのみんなに怒られるよ?」

「あ、そうだよね。えへへ」

我にかえってはにかむはるかに、きららは言葉を続ける。

「ぎーんねん。それで、はるはるたちは屋台の当番、何時からなの?」

「えーっと……ゆいちゃん、何時だっけ?」

「確か、16時からじゃなかったかな」

「あー……じゃあ間に合わないかなー」

「わたしも、生徒会でお祭りの準備があるから行けないかもしれないわね」

「そっかー……」

ちよつとションボリして息を吐くはるか。それから、はたと気づいたように思案顔になった。

「当番の時間までに浴衣の着付けしちゃうわないとだね。ゆいちゃん、手伝ってもらっても良い?」

「良いけど……実はわたしもそんな自信ないかも。いつもお母さん

にやってもらってたから」

「うー……だいじょうぶかなあ……わたしもひとりでやった事ないよー」

「もしよければ、私が手伝うわよ」

「ホントですかみなみさんっ！　ありがとうございますっ！　あ、でも、生徒会はお祭りの準備も手伝うんですよね……お時間、だいじょうぶですか？」

「平気よ。そのくらいの余裕はあるわ」

「なら、ぜひお願いしますっ！」

「ありがとうございます」

「ええ、任せておいて」

はるかたちの会話で、きらは夏休み前にベッドで交わしたトワとの遣り取りを思い出した。結局、あのとときのトワの真意はわからないままだ。

ちら、とトワの方を見る。

その横顔はやはり、どこか寂しそうだった。

■ ■ ■

「やっぱトワっち、浴衣着たいんじゃない……」

実家のマンションで、きららはひとり呟きながら雑誌をめくる。最新の流行やファッションに常にアンテナを張っておくのもモデルの大事な仕事だが、内容がまるで頭に入って来ない。トワの寂しそうな顔が、頭を離れないのだ。自然と、前にトワに見せた雑誌に手が伸びた。開くと、色鮮やかな浴衣姿が目飛び込んで来る。

この雑誌を見ているときは、トワも楽しそうだった。

なら、どうして？

「あ、コレとかトワっち似合いそう。うーん……でもこのかんざしはイマイチかなあ」

頭の中でトワを着せ替えながら雑誌をめくっていくと、気付く事があった。

「ひよっとしてトワっち、これ見て遠慮したんじゃない……」

それは、値段だった。

この雑誌に載っている浴衣はみな、それなりの値段がする。中学生の金銭感覚からすると、少し高めだ。

加えて、トワはこちらの世界に来たばかり。トワイライトだった頃の服を売って、当面の生活に支障がないほどの金額を得たものの、一回のお祭りの為だけに手を出すには抵抗のある値段だった。

「それに、お小遣いを使うにも高すぎるか……」

トワはときどき、望月先生の開く絵画教室の準備や、簡単な書類整理を手伝ってお小遣いを貰っている。

きつかけは、トワがささやかな恩返しとして、望月先生の仕事の手伝いを買って出た事だ。

学園長である望月先生は、トワが深く大きな問題を抱えている事を察しながらも詮索せず、学校へ通わせてくれている。その厚意に一方的に寄りかかる事に、トワが我慢できなかつたのだ。

そんな経緯から、トワは最初、望月先生からお小遣いを受け取るのを断った。しかし、そこは流石というべきか、望月先生は固辞しようとするトワの言葉をのりくらりと受け流し、お小遣いを受け取らせてしまった。

寮生活で衣食住はある程度保証されているが、それだけでは、着の身着のまま学園に転がり込んできたトワの生活はままならない。お小遣いというのは、そんなトワを慮った望月先生の口実だろう。

以来、優しいおばあちゃんと生真面目な孫のような関係は続いている。

そんな思いやりのこもったお金を、トワがおいと浪費するわけがない。雑誌に載っている浴衣の価格帯に、トワが躊躇うのは道理だった。

しかし、

「……だから、言ってくれないとわかんないんだってば」

一言相談してくれれば、いっしょに浴衣を探す事だって出来た。

浴衣の価格は上から下までかなり幅がある。安く済ませようと思えば、雑誌に載っている金額の半分以下に抑える事だって可能だろう。もしくは、レンタルという方法もあった。なんだったら、きらら

の家は何着かある浴衣から見繕つてもよかった。

お金の問題を口にし辛いのはわかる。けれど、悩みを自分の中で完結しようとしてしまうトワが、きららには歯がゆかった。ルームメイトになってかなり打ち解けてきたものの、今一步、トワはきららへ踏み込んで来てくれない。

トワは生真面目で、なんでもひとり背負い込みがちだ。それに、はじめて接する同世代の友だちへの戸惑いがあるのもわかる。

でもやっぱり、今一步の遠慮がきららには少し、寂しい。

「てゆーか、これはあたしの雑誌のチョイスが失敗だったなあ……」

こちらの世界の金銭感覚に疎いトワの立場になって考えてみれば、彼女の遠慮にはすぐ気付けそうなものだった。

けれど、もう遅い。もうお祭りはあしただ。

安い浴衣を見繕うにもレンタルするにも、時間が無かった。

再び、寂しそうな友だちの横顔が頭を過ぎる。

「うー……これじゃ、後味悪すぎるってえー……」

小さく唸り、頭を抱えるきららだったが、しばらくしてガバツと顔を上げた。

「そうだっ！ その手があったじゃんっ！」

言うが早いか机に放りだしていたスマホを取って電話をかけた。

「あ、もしもし。ごめんなさい。実はちよつとお願いしたい事があるんですけど——」

■ ■ ■

明けて翌日の昼過ぎ、きららは寮の自室を尋ねた。

「トワっち、居るー？」

「あら、きらら。そろそろお仕事の間では無くて？」

「そうそう、だからこっち寄ったんだ。トワっちにちよつと付き合いって欲しくてさ」

「わたくしに……ですか？」

「そう、トワっちに。さ、急ぐよー」

きよとん、とするトワの手を取ってきららは部屋を出た。

「な、なんなんですか？」

「いーからいーから。着いてからのお楽しみー」

戸惑うトワをよそに、悪戯っぽく笑ってきららはずんずんと歩いていった。

「……は……？」

着いたのは、夢ヶ浜にある撮影スタジオの衣装部屋だった。十数着の浴衣をはじめ、帯、下駄などがずらりと並んでいる。

「これがきょうの仕事。浴衣の撮影と、宣伝を兼ねて浴衣を着て夏祭りに行くの」

「はあ……」

「さ、選ぶよー。コーディネートはこっちで任せてくれるみたいだから」

きららは足取りも軽やかにハンガーに近寄って、浴衣を選び出した。すぐに数着見繕ってトワを鏡の前に立たせると、持って来た浴衣をトワにあてがい始める。

「うーん……こっちはちよつと派手過ぎ？ こっちはトワっちの雰囲気合ってないし……」

「あの、きららっ？」

「ん、なーに？」

「何をしているの？」

「見てわかんない？ トワっちが一番かわいくなれる浴衣探してるの」

「着るのはきららでしょう？ わたくしに試しても……」

「何言ってるの。トワっちも着るんだよ？」

「わたくしが？」

きららは肩口から顔を覗かせて、鏡越しにトワの顔を見た。ぱちくりとまばたく目を見つめ返す。

「そ。ひとりで着てくよりも、ふたりで着てった方が宣伝になるでしょうっ。」

言って、小さくウインク。

トワにも浴衣のモデルをさせて欲しい。

それが、きららがきのう電話でマネージャーの館さんに頼んだ事

だった。

「スポンサーの方からも、浴衣をもっと宣伝したいから、あたし以外にも夏祭りで歩いてくれるモデルを用意できないか、って言われてたみたいなんだよね。で、トワっちの出番ってわけ」

「で、ですがわたくしがモデルなどと……」

「だいじょうぶ、トワっちかわいいもん」

「ですがわたくしは、別に、その……」

「浴衣、着たかったんでしょ？」

「いえ、その……」

「もう、素直じゃないなー、トワっちは」

戸惑い、視線を泳がすトワの肩にそっと手を置く。それから、少し拗ねたような声を零す。

「……ちゃんと言ってよ。したい事とか、欲しいものとか、思ってる事とか。あたしだって、トワっちとしたい事、いっぱいあるんだから。トワっちの方が遠慮してたら、あたしの方も言い出しにくいじゃん」

「きらら……」

幾分かの申し訳なさと、それを上回る喜びの籠ったトワの眼差しで、きららは、自分が少し本音をしゃべり過ぎた事に気付いた。鏡越しに見つめ合ったこの状況が、口を必要以上に滑らせてしまったようだ。

「ま、まあでも、今回はあたしがミスちゃっただけど、さ」

「ありがとう、きらら」

照れから早口になったきららの手に、トワが優しく手を重ねた。

「そうですね……わたくしも、きららとしたい事、いっぱいありますわ。まずは……そうですね。きららの選んでくれた浴衣が着てみたいですよわ」

「よし来た。任せてー、このきらら様の浴衣コーディネートで、トワっちを百倍かわいくしちゃうから」

「ふふ……それは楽しみですこと」

ふたりは鏡から目を離して、直接互いを見る。くすぐったいような、恥ずかしいような、あたたかい気持ちになって、自然と互いに笑

みがこぼれた。

きょうよりあした、あしたよりあさって。

自分の夢みたいに一歩一歩、こうやってお互いに歩み寄っていき
る。

——そうだよね、トワっち。

きららは心の中で、笑い合う友だちに呼び掛けた。

トワつち誕生日記念SS 赤のコンチエルト

小さい頃、何度もお兄さまにせがんで聞かせてもらった昔話があった。

つよく、やさしく、美しく——世界中の夢を救った三人の物語。

花のプリンセス、チエリ。

海のプリンセス、ユラ。

星のプリンセス、セイ。

三人は、夢の力を抱いて絶望の魔女と戦った。

たとえ黒い茨が世界を呑み、絶望に染め上げようとしても、彼女たちはけして夢の輝きを曇らせたりはしなかった。

つよく——勇敢に魔女とそのしもべに立ち向かい、

やさしく——夢を持つ者の為に、喜び、憤り、悲しみ、寄り添って、

美しく——自らの夢の輝きで、人々に希望を示し続けた。

長く険しい戦いは、十二個のドレスアツプキーすべてと、三人のプリンセス、そして世界中の夢の力を集めて、ようやく終える事が出来た。

絶望の魔女を追い払った三人は、ホープキングダムを建国。以来、現代まで彼女たちが願ったとおりに、ホープキングダムは希望を絶やす事無く在り続けている。

——わたくしも彼女たちのようになりたい。

この話を聞かせてもらう度に、強く思った。

国民のみんなの夢を守るつよき、やさしさ、美しさ——すべてを備えたグランプリンセスは、トワにとって理想のプリンセスそのものだった。夢だった。

グランプリンセスになる事が、自分を慕ってくれる国民たちへの、精一杯の恩返しになる。それになにより、彼女たちのようなキラキラしたプリンセスになりたかった。

いまでも、その夢は変わらない。

絶望に身を落とした過ちも、夢を踏みにじって来た罪も、ひとつひとつあがなって、取り戻して、もう一度グランプリンセスになると心に誓った。

けれど、ただひとつ、取り戻せないものがあった。

——取り戻せないと、諦めていた。

■ ■ ■

キュアスカーレットとして歩み出す為にはひとつ、やっておかねばならない事があった。

「すうー……はあー……」

寮の、ある扉の前で小さく深呼吸。

胸の奥でうずく痛みや苦さをそっと押し込める。それから、扉をノックした。

「はーい……あ、トワちゃん」

部屋の主——春野はるかが、ノックの音に応じてひよっこり顔を出した。こちらの姿をみとめると、顔をほころばせた。相手の心にまっすぐ飛び込んで来るような、あっけらかんとした笑み。そんな彼女のあどけなさに、自分はどんな表情を返せばいいのか、いつも戸惑ってしまう。

これからお願いする事を考えれば、なおさらだった。

「……はるか。ふたりきりでお話したい事がありますの。お時間、よろしくて?」

「うん。だいじょうぶ、だけど……」

よほど自分の声と表情は固いものだったらしい。はるかも、何かただ事ではない気配を察して、笑顔が戸惑いに転じた。

はるかに招かれて、ベッドに腰掛ける。

「ゆいちゃんなら、さつきスケッチに出掛けていったばっかりでしばらく帰って来ないよ」

「……そう」

はるかに頷いてみせたものの、そこから先、言葉が出て来ない。何を言うべきか、どんな言葉で伝えるべきか、何度も何度も考えて

きた。なのに、切り出せない。俯いて、強く握った自分の手をただただ見つめる。

数秒か、あるいは数分か。

どれほどそうしてだろう。そ、と顔を上げてはるかを見る。

「……………うん？」

目が合うと、はるかは小さく笑んで小首を傾げてみせた。それは急かすでもなく『言ってみて？』とそつと語り掛けてくるようだった。お蔭で、強張っていた心が少し、ほぐれた。

小さく、口を開く。

「あの……………」

「なあに？」

柔らかい笑み。

これから自分が頼もうとする事を思い、再び胸に痛みが過ぎつつ。過ぎつつ、それでも、口にする。

「ごめんなさい」

「……………つて、え？ 急になんで!？」

頭を下げると途端、はるかはわたわたと慌て出した。つい今まで、慈しみすら感じられる表情を浮かべていたとは思えぬ狼狽ぶりだった。

「前に、わたくしはあなたの夢を笑い、大切な本を燃やそうとしてしまいました。その、お詫びです。そして、謝ったうえで、お願いしたい事がありますのです」

「……………お願い？」

「……………わたくしに、『花のプリンセス』を読ませて貰えないでしょうか？」

「え？」

「……………厚かましい事は、百も承知です」

顔を上げて、まっすぐにはるかの目を見た。

はるかか夢を嘲笑った自分が、その夢の象徴を読ませて欲しいなどと、どんな顔で言えたものか。それでも、目と目を合わせて逸らさず、言葉を続ける。

「ですが、わたくしは知らなければなりません。自分がいかに尊いものを踏みにじろうとしていたのかを。その罪と向かい合つてようやく、共に戦うと言ってくれたはるかへの優しさには応えられると思うのです。だから、お願いします。わたくしに『花のプリンセス』を、読ませてください」

再び、頭を下げる。

一歩一歩、やり直していこうと決めた。

ひとつひとつ、自分の罪を数えて、償って、グランプリンセスを指そうと。その先に、お兄様との再会もきつと待っている。

だから、これはその為の第一歩。

下げた頭への答えは、自分の手に重ねられたあたたかい感触だった。

顔を上げると、包むようにわたくしの手を取るはるかへの姿があった。

「えへへ」

至近で、はるかははにかむように笑うと、こう続けた。

「きつと、トワちゃんはこの部屋に来るまでたくさん悩んで、考えて、苦しんで、それで来てくれたんだよね？ でも、ごめんね。わたしいま、すつごく嬉しいの」

「嬉、しい……う？」

予想外の言葉を、思わず反復すると、はるかは頷いた。

「うん。だってそれって、トワちゃんがわたしの夢を知りたいって思ってくれたって事でしょ？」

「わたくしが、はるかの……う？」

そうだろうか。

やり直す為に、償う為に、痛みを伴う覚悟の為に——それだけじゃ、なかった？

わからない。わからないけど、そうなら良いな、と思えた。

心のどこかに、わたくしも知らない自分が居て、誰かの心を知りたいと思っている。

それはきつと、とてもあたたかいものだ。

「だから、わたしもトワちゃんに読んでもらいたいな。罪を向き合うとかそういうことじゃないくて、友だちに、わたしの夢を知って欲しい」

「友、だち……?」

その柔らかい響きを胸の内できゅくりとなぞっているうちに、はるか机の引き出しから宝物を扱う手つきで一冊の本を取り出して、ぴよん、と自分の横に腰掛けてきた。

「それじゃあ、読もつか」

「ええ」

呆けてるうち、笑顔をほころばせるはるかへ半ば無意識に頷いていた。



ふたり並んでベッドに腰かけて、一冊の本を読む。

奇妙な時間だった。

ページをめくる毎、はるかの息遣いすら伝わってくる。物語に沿って起伏する自分の感情とはるかの感情が重なって、彼女の想いが流れ込んでくるようだった。

つよく、やさしく、美しく——トワイライトだった頃に、はるかは自分だけのプリンセスを目指すと saying していた。あのときの言葉の意味が、はるかの理想と憧れが、この一冊に詰まっているとわかった。それは、遠い昔からよく知る理想と憧れに、とてもよく似ていた。まるで鏡写しみたい、そっくりだった。

「トワ、ちゃん?」

「……え?」

気付けば、頬を熱いものが伝っていた。顔を上げると、滲んだ視界の中、はるかや遠い昔の自分が重なって見えた。

それは、失くしたと思っていたものだった。

もう二度と、取り戻せないと思っていた。

けれど、こんな近くにあったなんて……。

「トワちゃん、どうしたの?」

「だいじょうぶ。だいじょうぶです。だいじょうぶですわ……」

気遣わしげな声に何度も頷きながら、涙を拭う。けれど、涙は後から後から零れて、まるで止まらない。

もう、諦めていた。

罪を抱いたまま、グランプリンススを目指す。それは、キュアスカーレットになったときに覚悟していた事。

けれど、痛みが消えたわけではない。

グランプリンススになるという夢を取り戻せた事はけして、無邪気なあの頃に戻る事を意味しない。無邪気に夢見るにはあまりにも、自分は絶望に身を置き過ぎた。

けれど、こんな遠い世界に、自分が失くしたものを、大切に育ててくれている人が居た。

その奇跡が、こんなにも愛おしい。

「はるか。あなたの夢は、とても素晴らしいものですわ」

「……え？ うん。ありがとう」

唐突な言葉に、はるかは目を瞬かせてから、小さくはにかんだ。けれど、わかっていない。

あなたがあなたのままで居てくれた事が、どんなに貴い事か。

思えば、ぞっとする。

一度は、この奇跡を自ら絶望の炎で焼こうとしていた。

それもまた、自分の罪だ。

ならば、その罪ははるかの夢を守ることで、あがなっていこう。

「……はるか。いっしょにグランプリンススに、なりましようね」

「うん。必ず」

胸に灯った、新たな決意の炎。

その熱さが言葉になって零れた。はるかも自分の口調から何かを感じ取ったらしい。強く、強く頷いてくれた。

まるで、協奏曲（コンチエルト）だ。

はるかと同じ曲を思い出す。

まるで違う旋律なのに、ピタリと重なり合って、新しい音が生まれるあの感覚。

人の夢も、きつと同じ。

夢の形は違っても、想いをそわせ、重ねる事で、新たな輝きが生まれる。

はるかど、みなみと、きららと、ゆいと。

彼女たちと、そう在りたい。

あがなう為、償う為だけじゃなく、彼女たちの事を知りたい。心からそう思える自分が、はつきりと見つかった。

あたたかいものがまたひとつ、見つかった。

3. 5話 みなみの悩み! 花が教えてくれたこと!

1 / 4

「みなみさまよ!」

「本当、相変わらずお美しい……!」

ノール学園の廊下を小さなささやき声が飛び交う。その中心に居るのは、廊下を歩くひとりの女生徒だ。

ただし、その少女を生徒と呼ぶには少し、違和感がある。

確かに、周りの生徒と同じ制服を着ている。しかし、大人びて落ち着いた表情といい、歩いているだけで気品を感じさせる挙措といい、とても中学生のそれとは思えないのだ。

少女の名前は、海藤みなみ。学園で知らぬものなど居ない有名人だ。

一年生のときから生徒会長を務め、学園を影に表に支えてきた勤勉で誠実な人柄。加えて、そんな内面の美しさをそのまま写し取ったような容姿。人目を惹くのも当然と言えた。学園に入って一、二年目となる生徒らは、さすがに彼女の姿を目にする度に色めき立つようなことはもうなくなつたが、まだ学園に来て一か月程度の新生となれば話はまた別だった。今も、一年生の教室の並びでは学園のプリンセスの姿にみな足を止めていた。

彼ら彼女らの視線をそよと受け流して、みなみはひとつの教室の前で足を止めて、中に居る女子生徒を呼び止めた。

「ごきげんよう。このクラスの体育委員の方は居るかしら?」

「はい、ごきげんよう。少々……お待ちください」

突然学園の有名人に話しかけられた彼女はわたたと教室を見渡して、一人のクラスメイトを呼んだ。呼ばれた男子生徒はみなみの顔を見るや用件を察した様子で、慌ててみなみのもとへ駆け寄ってくる。

「ごきげんよう。あなたがこのクラスの体育委員ね？」

「ご、ごきげんよう。あの、球技大会の種目希望アンケートですよね？」

す、すみません。まだ集計が終わってなくて……」

「期限はきのうまでよ？　いつまでに提出できるかしら」

「きよ、きよの昼休みには必ずっ！」

「わかったわ。それなら昼休み、生徒会室まで直接持つてきてちょうだい」

「はい、わかりましたっ！」

「次からは期限を守るようにね。この球技大会に関しては、体育委員のあなたがクラスの代表なんだから、その自覚をしっかりと持つように」

「は、はいっ！　気をつけますっ！」

きびきびと体育委員に告げて、踵を返す。そのまま一年生の教室の並びを立ち去ろうとして、ふと、窓の向こうから耳慣れた声が聞こえてきた。

「アン、ドウ、トロワ。アン、ドウ、トロワ」

澆刺とした声に目を向けてみれば、中庭でひとりの少女がバレエのステップを踏んでいた。

クセっ毛の髪の毛に、花が咲くみたいに爛漫とした笑顔。まだ拙くも、日に日に上達しているステップ。もはや、みなみにとって見慣れた姿だった。

案の定の姿に、思わず頬が緩んで口を開きかける。

「春野さ——」

「はるかちやーん。そろそろ教室戻らないと。ホームルーム始まっちゃうよー」

が、呼びかけは別の柔らかい声に遮られた。窓枠の外側から、メガネにお下げの少女が姿を見せる。

「あ、いつけない。ゆいちゃん、呼びに来てくれてありがとう」

「はるかちゃんだったら、夢中になるとすぐ時間忘れちゃうんだから。気をつけないとダメだよ？」

「えへへ……ごめんね」

ふたりはすぐに並んで、下駄箱の方へと歩いて行ってしまった。
結局、声をかけそびれたみなみはそのまま何事も無かったかのよう
に廊下を歩いて行った。

一瞬、窓から視線を外すときに寂しげな表情を浮かべたが、本人で
すらきつと、そのことに気付いていない。

■ ■ ■

「ナオト、球技大会のアンケート結果ってどうなってたっけ？」

「それならいま、会長に確認して貰ってますよ」

「あやか、ノーブルパーティーの記録係って映画部にお願いしちゃつ
ていいんだよね？」

「そっちはみなみがやってくれて、引き受けて貰えるそうですわ。そ
れより、裁縫部にお願いしてる貸しドレスの事ですけど——」

ここ最近の生徒会は、日を追うごとに忙しくなっていく。

生徒の自主性を重んじるノーブル学園では、学内の各行事の企画や
運営も生徒が主体になって行う。そして、その取りまとめを行うのが
生徒会だ。その為、球技大会とノーブルパーティーという二大行事の準
備を同時進行しなければならぬこの時期、生徒会は多忙を極める。

そんな多忙さを一手に担うのが、生徒会長であるみなみだ。

体育委員会、学級委員会、オーケストラ部、料理部、裁縫部、映画
部——二つの行事を合わせれば数十にも及ぶ参加、協力団体と連携を
取りつつ、準備作業を一日単位のスケジュールで進行していく。大人
でも目を回しそうな仕事量を、みなみは完璧にこなしていた。

しかし、

「——なみ？ みなみってば」

「……何かしら？」

「ほら、そろそろ会議の時間でしょ？」

「え？ ええ、ええ、そうだったわね」

きょうのみなみは何処か精彩を欠いていた。

みなみがハツと顔を上げると、ショートカットヘアの快活そうな少
女の訝し気な顔があった。

東せいら。みなみの幼なじみだ。

みなみが首を巡らすと、長机に着いた他の役員もせいらと同じ様な顔でみなみの事を見ていた。

「ごめんなさい、少し考え事をしていて……」

「だいじょうぶ？ やっぱり、もう少し私たちにも仕事を割り振ってくれても良かったんじゃないかと？」

せいらに次いで声を上げたのはあやかだ。おつとりとした仕草で頬に手を当てて、黒目がちの瞳に気遣わしげな色を浮かべている。もう一人の幼なじみのそんな様子に、小さく笑みを返す。

「ありがとう。でも平気よ、これくらい」

「そう？ なら良いけど……」

なおも心配そうなあやかだったが、事実、みなみは自分の仕事量を少しも負担に思っていないなかった。自分の能力を超える仕事量を抱えているつもりなどなく、どこか作業は順調そのもの、スケジュールを前倒しにしても良いと考えているくらいだった。

それに、学園のみんながどうすれば笑顔になってくれるかを考える生徒会の仕事は、自分が目指している父や兄の在り方に通じるものがある。苦に思う事などまるでない。

だから、自分がうわの空だった理由は別にある。

その理由とは――

「さ、始めましょう。――小芝くん、板書をお願いね。きょうの議題は、ノーブルパーティーの使用備品の確認についてよね」

再び浮かびかけたひとりの少女の顔を頭から振り払うと、みなみは凜とした声で告げた。

■ ■ ■

生徒会の会議が思ったより長引いてしまった。

校則違反にならない程度の早足でみなみは急ぐ。向かう先は、バレエのレッスンルーム。会議の後、はるかにバレエのレッスンをすることになっていたのだ。

「アンドウトロワ、アンドウトロワ――」

すでにはるかには練習を始めているらしく、レッスンルームに近付くと、明るい声が聞こえてきた。

「あ、海藤さんっ!」

みなみが扉を開けると、パツと花が咲くようなはるかの笑顔に迎えられた。練習を止めると、クセっ毛を揺らしてみなみの方に駆け寄って来る。あどけない彼女の顔から目線を時計へ移すと、約束していた時間を十分ほど過ぎていた。

「ごめんなさい、遅くなってしまつて」

「そんな! 謝らないでください。むしろ、わたしの方こそごめんなさい。海藤さん、生徒会のお仕事で忙しいのに練習に付き合つて頂いちやつて……」

「いいえ、春野さんが謝る必要は無いわ。レッスンをみると約束したのは私だもの。なのに、最近はなかなか時間が取れなくて……ごめんなさいね」

「いいんです。海藤さんこそ、無理しないでください」

「だいじょうぶよ」

手をパタパタと振るはるかに笑つてみせた。それから一転、表情を引き締めた。

「それじゃあ、練習始めましょうか」

「はいっ!」

はるかの気合のこもった声を合図に、練習が始まった。

「そこ、足をもつと高く上げて」

「は、はいっ!」

「指先が震えてる。姿勢を保つて。ピタツと止める」

「は、はいいいいいっ!」

「次はそこからターンして——」

はるかは四苦八苦しながらも、みなみのスパルタについて来てくれたが、四十分ほどのレッスンを終わると、床にへたり込んでしまった。

「うわあ……疲れたあー」

「お疲れさま。よくがんばつたわね」

みなみがミネラルウォーターのペットボトルを差し出すと、はるかはぴよこん、と立ち上がって受け取った。

「きょうもレッスン、ありがとうございましたっ! 海藤さんのお蔭

で、バレエ、どんどん上手くなってると思いますっ！……もちろん、海藤さんからしてみたらまだまだ全然でしょうけど……」

「そんな事は無いわ」

「恥ずかしそうにはにかむはるかに、みなみは優しく首を振ってみせた。

「春野さんは、この短期間でとてもよくやってるわ。正直、私も驚くくらいに上達してるもの」

「え？　ほんとですか!?!」

「ええ、本当よ。だから、もっと自信を持ちなさい」

「そんな風に言ってもらえると嬉しいですけど……なんだか照れますね」

えへへ、と顔を赤らめるはるかの仕草に、自然とみなみの顔もほころんだ。

「これからもよろしくお願いしますね、海藤さんっ!」

「任せて頂戴。ただ、しばらくはなかなか時間が取れないかもしれないなだけれど……」

「だいじょうぶです。海藤さんがわたしを応援してくれるみたいにな、わたしも海藤さんの事、応援してますからっ!」

はるかの言葉に、みなみは虚を突かれて目を瞬かせていたが、すぐに目を細めてはるかに笑みを返した。

「ええ、ありがとう」

本当に、不思議な子だ。

みなみは思う。

彼女と話していると、ふとした瞬間に元気づけられる言葉が返ってくる。けして強い言葉じゃない。そっと寄り添うような、背中を押すようなさりげない言葉だ。けれど、その一言で、自然と頑張ろうと思えてくる。

そんな彼女の事を、もっと知りたいと思う。

知りたいと思って、けれど、その一步の踏み出し方がわからずに居た。

食堂でひとり夕食を摂るみなみは、どこか浮かない顔をしていた。大人びた顔立ちのみなみが物憂げな表情を浮かべている様は、一枚の絵画のように端整で、近寄る事すら躊躇わせる。事実、喧騒に満ちた食堂の中であって、みなみの周りだけはぼっかりと席が空いていた。

みなみの頭を占めるのは、ここ数日の事。

自分が忙しいばかりに、はるかかのレッスン時間が減ってしまった。加えて、パフューム探しもなかなか手伝えずに居る。

これらの事に、みなみは出来る限りの対応を取っていた。減ってしまったレッスンは、練習ノートを作って補った。

パフューム探しは、生徒会の空き時間を充てて校内を探している。けれど、違う。

そうではない。それでは自分の抱えるもどかしさが消える事が無いと、みなみは気付いていた。

みなみの思うところは、ただひとつ。

——春野さんと、どうしたら仲良くなれるのだろうか？

最初は、自分を頼ってくれた彼女の期待に応えたい、という思いからレッスンに応じた。面と向かって自分を頼ってくれるのが嬉しかったというのもある。これまでの学園生活で、憧憬の眼差しを遠巻きに向けて来る人たちは大勢いても、憧れという粹を飛び越えて自分に接して来てくれる人は居なかったのだ。

やるからには手を抜かない。

最初の宣言は、みなみなりの嬉しさの裏返しでもあったのだが、はるかはそのにきつちりと応えてみせた。

はるかには決して器用な訳ではない。むしろ、そそっかしくて要領が悪いくらいだ。けれど、それを補って余りある努力をひたむきに積み重ねられる少女でもある。加えて、物事の本質を直感的に捉える力に長けていた。だから、はじめがどんなに不器用で拙くても、一度コツを覚えると、みなみが驚くほどに上達していくのだ。

そして、その力が発揮されるのは、バレエの中だけではない。

みなみに対しても、学園のプリンセスという評判や枠組みに囚われる事無く、自分が見たまま感じたままに理解してくれた。そして理解した上で、自分を慕ってくれている。

気がつけばみなみも、そんなはるか先の事をもっと知りたいと思うようになっていた。

けれど、みなみにはその想いの表し方がわからない。

プリンセスに変身して夢を守る為に怪物と戦う、なんて言う非日常の秘密を共有しているものの、いざ日常生活に立ち戻ってみれば、学年も違うし、同じ部活に入ってるわけでもない。学園生活の中での接点は驚くほどに少ない。パフューム探しとバレエのレッスンが無ければ、一日顔を合わせない日も珍しくないほどだ。

そんな中で、どうやって仲良くなっていけば良いのか――。

「ちよつと……、良い?」

思いに沈むみなみのそばで、軽やかな声がした。しかし、聞き覚えの無いその声が自分に向けられたものだと思ひもしなかった。

「ね、聞いている?」

「……え? ええ。ごめんなさい。席なら空いてるわよ。どうぞ」

「ありがとう」

再び声がかかって、ようやく自分が話しかけられていたのだと気付く。少女は軽くお礼を言って、みなみの対面に食堂のトレーを置いて座った。

途端、みなみの目の前に星がともった。

そう錯覚するくらい、みなみの前に座った少女は人目を惹いた。

腕も足も長くて、すらりと痩せた体つきは同年代の少女なら間違いない程度に手が加えられていた。

顔は、驚くほどにその輪郭が小ぶりだ。その中に小さな唇とすっと通った鼻梁、大きな瞳が綺麗に収まっている。

特に印象的なのが、目。

猫を思わせる形の目は小顔の中では際立って大きくて、見る者を否応なく惹きつける。いまのみなみもそうだった。

もつとも、当の彼女の方はみなみに一瞥をくれる事すら無く、食事を始めた。それも、驚くほどに早い。

「……そんなに急いで食べると、喉に詰まらせるわよ?」

「え? ああ、でも時間無いし」

思わずみなみが口を開くと、彼女はしゃべる時間すら惜しいと言わんばかり素っ気なく答え、あつと言う間に完食してしまった。

「ごちそうさまでした、つと」

手を合わせて、ペコリ。

すぐに席を立つや、早足で食堂を後にしてしまった。

「……天ノ川きさらさん、だったかしら?」

今さらながら、気がついた。

前に有名モデルが新入生に入ってきたとせいらが話題にしていた。そのときに見せて貰ったファッション雑誌の表紙が彼女だった。

食堂の出入り口から視線を戻してあたりを見回すと、自分の周りの席がガラんと空いているのが目についた。やたらと華やいでいた彼女が去った後だと、尚更だった。

——彼女のようなフランクさがあれば、わたしも……。

思わずそんな考えが過ぎって、表情が曇り、目を伏せた。

「海藤さん……」

だから、みなみは少し離れた席から自分を見つめていたはるか目の線にも気付けなかった。

■ ■ ■

「海藤さん、なんだか元氣無さそうだったな……」

「パフ?」

はるかは寮の自室でパフの毛を櫛ですきながら呟いた。

「みなみ、疲れてるパフ?」

「うん。最近、生徒会がちよつと忙しいみたいだから、きっとそれで……」

「その上、はるかのレッスンもパフユーム探しも手伝ってくれてる口

マ。みなみはがんばり屋さんロマ」

つぶらな瞳で見上げてきたパフに頷くと、ベットの柵に留まっていたアロマが言葉が続けた。アロマは純粹にみなみを誉めているだけなのだろうが、はるかにしてみれば自分の悩みをズバリ言われてしまった気がして、思わずため息をついてしまう。

「そうなんだよねえ……わたし、ヘンな時にレッスン頼んじやったのかも」

「でも、レッスンを頼んでなかったら、まだみなみはプリキュアに目覚めてなかったかもれないロマ」

「それはそうかもだけど……」

はるかは言葉につまる。

確かに、たったひとりでデイスタークの振り撒く絶望と対峙する事を思えば、隣にみなみが居てくれる事はこの上なく心強いと思う。

けれど、みなみからしてみたらどうだろう？

「わたしが助けて貰ってるばかりで、わたしの方は海藤さんの力になれてるのかな、って」

「確かに、みなみに比べてはるかはおちよこちよいで頼りないロマ」

「うう……やっぱそうだよね」

「けど、はるかと居るときのみなみ、とっても嬉しそうパフ」

「ありがとう、パフ。でも、助けてもらってばかりじゃられないよ。海藤さんにふさわしいわたしにならなきゃ」

むん、と力んでみせるはるか。

強く、優しく、美しく。

はるかの知る限りで、理想のプリンセスに一番近い場所に居るのがみなみだ。彼女にふさわしい自分になる事は、自分の夢に近付く為でもあるはず。

「よし、そうと決まればあとはがんばるだけっ！」

「どうがんばるロマ？」

「それはこれから考えるっ！」

「ロマッ!？」

グ、と握り拳を作って意気込むはるかの言葉に、アロマは思わずつ

んのめった。それとは対照的にパフは無邪気なもので、はるかの周りをぴよこぴよこ飛び跳ねて応援しだした。

「フアイトパファー！」

「うん、ありがとう！」

「心配ロマ……」

「ほら、おにいちゃんも応援するパファー！」

「ロ、ロマ!? おにいちゃんを振り回しちゃダメロマー!?!」

「はるかちゃん、ただいまー」

一人と二匹の賑やかな声に紛れて、柔らかい声が部屋に入ってきた。

はるかのルームメイトで友達のゆいだ。アロマと、アロマを振り回していたパフが慌てて飛び退く。

が、ひと足遅かったらしい。

「あれ? いまパフちゃん二本足で立ってなかった?」

「パフ!?!」

「それに、その小鳥さんの羽を取って踊ってたような……?」

「ロマ!?!」

ゆいの言葉に、パフとアロマがビクン、と身体を強張らせた。当のゆいは、何気ない口調でなおも続ける。

「あと、はるかちゃん、なんだか誰かと話してた?」

「ゆ、ゆいちゃん、気のせいだよ、気のせいっ!」

「そう……?」

たまらずはるかが引きつった笑みで取り繕うが、却ってその不自然な様子に、ゆいがきよとんと小首を傾げる。

「あ、そうそうっ! あっ! パフとお話してたのっ! あしたからまたがんばるぞー、って。新しい目標も出来たしねっ!」

「目標? プリンセスになる為の?」

今度は、完全にゆいの気が逸れてくれた。安堵も手伝って、はるかは勢い込んで頷く。

「そうっ! 気合満開だよっ!」



「——とは言ったものの、どうしよう」

朝の日課のランニングをこなしながら、はるかはため息をこぼした。

横目にはきらきらと朝日を返す水面。走る自分に寄り添うように緩やかに寄せては返す波。海岸沿いははるかお気に入りランニングコースだったが、きょうばかりはため息を助長させた。

凧いだ海は、みなみにとてもよく似ていた。

包み込むような穏やかさも、凧とした静けさも。

深いところに秘めたものを見せてくれないところまで、そっくりだった。

みなみの力になると決めたのは、おとといの事。きのうのバレエのレッスンのときに、さつそくみなみの力になるべく生徒会の手伝いを申し出たものの、やんわりと断られてしまったのだ。そうなる、はやくも万策尽きてしまう。

「はあ……わたしに出来る事って、なにかあるのかなあ……」

名案は思い浮かばず、ただただ、ため息ばかりが零れる。

自然、常とは違う覇気のない走りになってしまう。纏まらない思考にうわの空のまま、足だけをただただ前へ前へと進めていく。

「あ、いけないっ!」

するといつの間にか、自分で決めたUターンポイントを通り過ぎてもなお走っている事に気付いた。入学式ときには、ここよりも更に遠くへ行ってしまったせいで、初日からの遅刻と言う大失態を犯してしまったのだ。

「うん、いまならまだ戻れるっ!」

自分の走る速さを考えると、朝のホームルームに間に合うギリギリの距離だった。急いで踵を返す。

「危なかった……あとちよつと先まで行っちゃったら間に合わないところだった……」

入学式の日に行った道のりを思い出しながら胸を撫で下ろし——はた、と足を止めて振り返った。

「って、そういえばこの道の先って……」

あの日、自分がこの道の先で見た光景を思い出す。
途端、目の前が晴れた。

「これだっ！」

思いついた次の瞬間には、再び走ってきた道のりの先へと駆け出していた。前に自分が走った道筋を思い出しながら辿って行って、
“それ”に辿り着いた。

辺りを見渡し、両手を広げて喜びをいっぱいに表示して、

「あつたっ！ わたしが出来る事っ！」

叫んだ。

そこにはもう、先ほどの曇った表情は無い。花が咲くような満面の
笑みだ。

が、次の瞬間。

両手を広げた万歳の姿勢のまま、笑顔を引きつらせた。

「あ、朝のホームルーム始まってる!？」

この後、はるか朝のホームルームどころか一時限目まで遅刻して
座間先生に怒られる事となる。